

複合名詞の発音とアクセント

～『新辞典』のねらいとアクセント規則～

メディア研究部 田中伊式

前部要素と後部要素から成る「複合名詞」のアクセントは、後部要素ごとに、一定の規則性が見られる。この点に着目し、後部要素およそ800項目を見出し語として立て、アクセントの型を掲載したのが、巻末付録の「複合名詞の発音とアクセント」である。

今回は、これまでのA型、B型といったアクセント型の表示方法を、より明示的な分かりやすいものにしたほか、用例については、語の網羅性よりも、アクセント型の習得支援に重きを置くなど、利用者の使い勝手を重視した。本稿では、こうした改訂のポイントについて報告する。また「複合名詞のアクセント」は、先行研究でも指摘されているとおり、一定の規則性を持っている。これを、後部要素の拍数ごとに、大きく3つ(①2拍以下、②3～4拍、③5拍以上)に分けたところ、それぞれのカテゴリーがさまざまな特徴を示していることが確認できた。

1. はじめに

1-1 狭義の複合名詞と広義の複合名詞

複合名詞のアクセントを考えていく上で、「複合名詞とは何か」ということについて、まず触れておきたい。

窪菌(1987)では、「複合名詞」を次の2つに分類している。

- ・複合化複合名詞
- ・非複合化複合名詞

つまり、一般に「複合名詞」といわれるものの中には、「複合している」ものと「複合していない」ものがあるということになる。

例えば、「世代交代」「行方不明」は、「複合している」複合名詞であり、これに対して、「新旧交代」「消息不明」は、「複合していない」

複合名詞であると考えられる。

これを、今回の改訂で採用したアクセント記号で表すと、以下のとおりとなる。

・複合化複合名詞

世代交代 [セダイコ\ータイ]

行方不明 [ユクエフ\ーメー]

・非複合化複合名詞

新旧交代 [シ\ンキュー・コータイ]

消息不明 [ショーソク^ク・フメー]

この稿では、以下、「複合する」ということばを「複合化複合名詞となる」という意味で用いる。また、新辞典の付録部分で扱ったのは、複合した語のアクセントが全体としてひとつにまとまる¹⁾、狭い意味での「複合名詞」である。

1-2 複合することによるアクセントの変化

複合名詞のアクセントの最大の特徴は、複合することにより、アクセントが、単独の語のアクセントから変化するという点である。単独では起伏型のアクセントを持つ語が、複合して前部要素となることで下がり目を失ったり、単独では平板型のアクセントだった語が、複合名詞の後部要素となることにより、後部要素の1拍目の後に、下がり目が来ることがよくある。例えば、以下のような例である。

世界記録 [セカイキ\ロク]
世界 [セ\カイ]
記録 [キロク]

2. 「巻末付録複合名詞」の3つのねらい

前章で述べたアクセントの変化は、その代表的なものだが、ほかにも「複合名詞」のアクセントはさまざまな変化を見せる。その変化には、ある程度の規則性があり、それは、後部要素によって決まることが多い。

そこで、巻末付録として掲載した「複合名詞の発音とアクセント」では、後部要素を見出し項目として、五十音順にまとめた。後部要素ごとにまとめたという点では、『1998年版』を踏襲しているが、そのねらいには、大きな違いがある。

(1) アクセント型 (パターン) を新しい分類と名称に

これまでは、アルファベットAとBを使い大きく2つのカテゴリーに分け、後部要素の1拍目にアクセント核が来るものをA型、前部要素の最終拍に核が来るものをB型として

きた(B型のうち、さらに特殊拍²⁾などの影響で1拍前にずれるものについては、B*型とした)。そのほか、複合語全体が「平板」となるものを除いては、特に型名を示してこなかったが、今回の改訂では、これらの分類および名称についても見直すことにした。

(2) 「網羅主義」から「類推主義」へ

旧版では、用例をできるかぎり多く並べて示す、いわば「網羅主義」を採っていたが、その方針を改めた。この新しい辞典を使うことで、使い手がアクセントを身につけやすくなるような、習得支援(学習支援)をめざした。

(3) 見出しと用例、それぞれの語を刷新

見出し、用例とも、使用頻度が低いと思われる語、時代とともに使われなくなった語を削除し、新しい語を導入することで、21世紀の辞典としての実用性をより高めた。

以上3つの特徴を順に詳しく見ていく。

2-1 アクセント型 (パターン) を新しい分類と名称に

旧版では、「A型」「B型」(さらに「B*型」)を使用していたが、新辞典では、分かりやすさを優先した以下の名称を使い、この4分類を基本とした。

- ① 後部一型
- ② 前部末型
- ③ 後部保存型
- ④ 平板型

① 後部一型(旧A型)とは、後部要素の1拍目にアクセント核が来るもので、例えば以下のような語が該当する。

…○○+●●…=…○○●\●…

「相談相手」[ソーダンア\イテ]

「学級委員」[ガッキューイ\イン]

「世界記録」[セカイキ\ロク]

「個人経営」[コジンケ\ーエー] など

② **前部末型** (旧B型) とは、前部要素の最後の拍にアクセント核が来るもので、以下がそれに当たる。

…○○+●●…=…○○\●●…

「郷土愛」[キョード\アイ]

「薬売り」[クスリ\ウリ]

「外科医」[ゲカ\イ]

「出席簿」[シュッセキ\ポ] など

③ **後部保存型** とは、後部要素のアクセント核が、そのまま複合語全体のアクセント核となるもの³⁾。

・後部要素がもともと中高の場合

「教育委員会」[キョーイクイイ\ンカイ]

「最高司令官」[サイコーシレ\ーカン]

「伊勢物語」[イセモノカ°\タリ] など

・後部要素がもともと尾高の場合

「入門書」[ニューモンショ\]

「最高裁判所」[サイコーサイバンショ\]

など

④ **平板型** とは、語全体に下がり目のないもの。

「ねずみ色」[ネズミイロ^ー]

「合理化」[ゴーリカ^ー]

「予定表」[ヨテーヒョー^ー]

「言い間違い」[イーマチカ°イ^ー] など

2-2 「網羅主義」から「類推主義」へ

旧版では、例えば「～家(か)」の項目は、

以下のようにになっていた。

～家 (平板) ○○○方

愛煙～、愛妻～、演出～、音楽(ガク)～、外交～、鑑定～、脚本～、教育～、恐妻～、銀行～、勤勉～、金満～、空想～、芸術～、劇作(ガク)～、劇評～、健脚～、健たん～、建築～、交際～、好事(ク)～、財産～、作詞～、作曲～、事業～、資産～、慈善～、思想～、実業～、資本～、社交～、宗教～、収集～、小説～、凶案～、随筆～、声楽(ガク)～、政治～、専門～、戦略～、蔵書～、素封(ゾホ)～、彫刻～、著作(ガク)～、刀けい(圭)～、道德～、篤農～、徳望～、努力～、発展～、批評～、評論～、文筆～、勉強～、法律～、野心～、雄弁～、楽天～、理想～、理論～、歴史～

使い手は、この中から自分の目当ての語を捜し出すわけだが、これだけ用例が多いと目的の語にたどり着くまでに時間がかかるおそれがあった。

一方、新辞典では、以下のような示し方をした。

～か【家】**平板**○○○カ^ー
建築～、作詞～、努力～

用例は、わずか3語である。前部要素にどんな語が来ても、「～家(か)」は、「基本的に平板型になる」ことが重要だと考えた。調べたい語そのものが掲載されていなくても、その語のアクセントが類推できればよいというのが、今回の改訂にあたり採った方針である。

一方で複数のアクセント型を持ち、類推では判断しかねる語については、丁寧に示した

(下記は、いずれも今回新たに立項した見出し語である)。

例えば「～糸」は、以下のように示した。

～いと【糸】
後部 〇〇〇イ\ト
小町 ⁽¹⁾ 、刺しゅう ⁽²⁾ 、しつけ ⁽¹⁾ 、 ミシン ⁽³⁾
平板 〇〇〇イト
麻 [～] 、絹 [～] 、組み ⁽⁴⁾ 、毛 [～] 、釣り [～]
(注)(1)は、〇〇〇イ\トも。
(2)は、シシュ\イトも。
(3)は、ミシ\イトが優先。
(4)は、クミ\イトも。

また「～切り」は、以下。

～きり【切り】
後部 〇〇〇キ\リ
ガラス ⁽¹⁾ 、缶 ⁽²⁾ 、爪 ⁽³⁾ 、指 ⁽³⁾
平板 〇〇〇キリ
足 [～] 、石 ⁽⁴⁾ 、縁 ⁽⁵⁾ 、すり [～] 、湯 [～]
(注)(1)は、ガラ\キリ。
(2)は、カンキリ\も。
(3)は、〇〇〇\も。
(4)は、イ\キリも。
(5)は、エンキリ\、エンキ\リも。

「～粉(こ)」は以下。

～こ【粉】
平板 〇〇〇コ
打ち ⁽¹⁾ 、強力(キョーリキ) [～] 、 くず ⁽²⁾ 、小麦 [～] 、米 ⁽²⁾ 、パン ⁽¹⁾
前部末 〇〇〇\コ
かたくり ⁽³⁾ 、白玉 ⁽⁴⁾ 、 中力(チュウリキ) [～]
(注)(1)は、〇〇〇コ\。(2)は、〇〇〇コ\ が優先。(3)は、カタク\リコ、 カタクリコ [～] も。(4)は、〇〇〇コ [～] も。

「～糸」「～切り」「～粉」のアクセントは
いずれも多様なのだが、このことは本編の記
載だけでは分からない。今回の改訂では、こ
うした点を分かりやすく示すように努めた。

また例外的なもの、特に注意が必要なもの
についても、なるべく丁寧に示した。例えば、
「～状(手紙)」では、通常、「案内状、委任状、
挑戦状」といずれも「平板型」になるのに対
して、「年賀状」については、「前部末型(〇
〇〇\ジョー)」が優先となることを示した。
「賛美歌」や「二次会」についても、「～歌」「～
会」のほかの用例とは異なる例外的なふるま
いをするを(注)で示した。

2-3 見出しと用例、それぞれの語を刷新

新辞典で、見出しとして立てた項目(後部
要素)は812となった。使用頻度が高いと思
われる語や、アクセントに迷いやすい語など、
新たに283項目を付け加える一方、時代遅れ
となった語、生産性が低いと思われる語を中
心に、97項目を削除した(なお、今回の改訂
では、複合した地名は、別になっていたもの
をひとつにまとめ、[地名]というマークを
つけた)。また、用例についても同様に語を
刷新した。

○新規に立項した見出し(283項目)⁴⁾

～愛、～上がり、～汗、～遊び、～あめ、 ～アルコール、～いか、～池、～移植、～遺跡、 ～委託、～市場、～糸、～芋、～イン、～受け、 ～歌・唄、～浦、～占い、～売り、～運河、 ～絵、～援助、～汚染、～落とし、～蚊、～下、 ～歌、～海、～貝、～外、～海峡、～街道、 ～がかり、～確認、～掛け、～貸し、～菓子、 ～形、～潟、～がに、～神、～紙、～髪、

～柄、～ガラス、～川、～管、～がん、
 ～感染、～キー、～気味、～休業、～丘陵、
 ～峡、～曲、～拒否、～切り、～切り・斬り、
 ～菌、～筋、～区、～苦、～口、～組み、
 ～ぐも(×蜘蛛)、～形、～系、～犬、～券、
 ～県、～見学、～件数、～子、～っ子、～粉、
 ～湖、～口、～校、～交換、～貢献、～高原、
 ～工場、～声、～コーヒー、～腰、～古墳、
 ～婚、～剤、～罪、～細胞、～材料、～坂、
 ～魚、～先、～崎、～作、～酒、～ざけ(×鮭)、
 ～山、～山地、～山脈、～市、～紙、～字、
 ～支援、～島、～車、～者、～シャツ、～銃、
 ～所、～書、～状(状態)、～状(手紙)、
 ～障害、～条件、～焼酎、～情報、～ショー、
 ～色、～食、～諸島、～心、～神、～酢、
 ～水、～水道、～スキー、～ずし、～スポット、
 ～請求、～制作・製作、～席、～船、～戦、
 ～線、～像、～相談、～そば、～空、～村、
 ～損、～台、～台風、～竹、～茸、～岳、
 ～立て、～たて、～たまご、～ダム、～弾、
 ～違い、～虫、～町、～長、～痛、～漬け、
 ～ティー、～デー、～手続き、～店、～点、
 ～展、～転換、～点数、～島、～塔、～棟、
 ～峠、～とじ、～届、～井、～菜、～灘、
 ～人、～認識、～沼、～値、～燃料、～野、
 ～菌、～バー、～パイ、～破壊、～博士、
 ～箱、～ばさみ、～橋、～肌、～腹、～払い、
 ～版、～パン、～半島、～火、～日、～ひげ、
 ～姫、～票、～表現、～品、～ピン、～ファン、
 ～服、～ふぐ、～不足、～平野、～蛇、
 ～弁(方言)、～弁(弁当)、～弁(調節装置)、
 ～ペン、～保育所、～法(法律)、～法(方法)、
 ～砲、～坊、～棒、～帽、～方言、～法人、
 ～放題、～方面、～干し、～星、～保証、～本、
 ～本数、～盆地、～魔、～前、～町、～待ち、
 ～間違い、～祭り、～マン、～ミーティング、
 ～岬、～虫、～蒸し、～娘、～村、～名人、
 ～麺、～者、～物、～屋、～山、～洋、～要請、
 ～読み、～りす、～流(流れるもの)、～利用、
 ～量、～漁、～類、～列島、～炉、～忘れ、
 ～わに、～湾、～ワン

○削除した見出し(抜粋)

～違反、～稼業、～学士、～キーパー、
 ～議会議員、～がるた、～国民、～孤児、
 ～座敷、～時雨、～地獄、～失業者、～島田、
 ～抄、～浄土、～人種、～水晶、～ずきん、
 ～線香、～争議、～草履、～だるま、～天、
 ～伝染、～婦、～婦人、～便所、～労働者、
 ～話法

○新規に掲載した用例(抜粋)⁵⁾

政治改革、首脳会議、有効活用、死生観、
 護衛艦、協力関係、判断基準、准教授、
 デジタル写真、介護福祉士、突然死、夏時間、
 懐古談、急性アルコール中毒、燃料電池、
 電波時計、領海内、遊覧飛行、経年変化、
 コンビニ弁当、人間模様、武器輸出、
 業界用語、通話料

○削除した用例(抜粋)

農業委員会、婦人運動、ムード音楽、
 健康優良児、夏時刻、衛生思想、電話室、
 分解写真、赤新聞、低物価政策、懐旧談、
 米穀年度、SP盤、農事番組、惣領息子、
 電話料

このほかの用例では、2001年の中央省庁
 再編で変更された「経済産業省」などの機関
 名についても対応した。そのほか、「消費者庁」
 (2009年に発足)、「防衛省」(2007年に防衛
 庁から移行)についても同様である。

2-4 そのほかの特徴

○本編アクセントとの整合性 —(注)の工夫—

複合名詞が複数のアクセントを持つ場合、
 本編のアクセントとの整合性を、優先順位も
 含め重視した。(注)の中で、「～も」と「～
 が優先」を使い分けたりするなどして、本編

との整合性を保つようにした。

○*を有効に活用することで、(注)を大幅に減らし、見やすくした

旧版では、特殊拍などの影響で、アクセント核が1拍前にずれる語を、すべて(注)の中で処理したため、膨大な数の(注)が生まれてしまったが、(注)ではなく、用例に直接、*マーク⁶⁾をつけることにより簡素化を図った。

○二字漢語については、「複合名詞」という扱いをしない

これまでは、一部の二字漢語(「～医」の「校医」「名医」など)を用例の中に含めていたが、これらを「複合名詞」として扱うのは無理があり、新辞典では外すことにした。

3. 複合名詞のアクセント規則

今回の改訂で整理し直し、アクセント型の分布状況を調べると、先行研究でも指摘されているように、複合名詞のアクセントは、一定の規則性を持つことが分かった。

一言で言えば、後部要素の拍数ごとに複合アクセントのパターンには特徴的な傾向が見られ、後部要素が①「2拍以下の場合」、②「3～4拍の場合」、③「5拍以上の場合」の3つに大きく分類することができる。

分布状況を見てみると、後部要素の最初の拍にアクセント核が来るものが最も多く、前部要素の最終拍に核が来るものがそれに次ぐ。

後部要素の拍数ごとに、どのような特徴があるのかを見ていく。

3-1 後部要素の拍数による3分類

①後部要素が2拍以下の場合

多くは、**前部末**型(前部要素の最終拍に核が来る)

〈例〉

・1拍のもの …○○+●=…○○\●
～医、～下(か)、～記、～機、～区、
～土、～市、～死、～紙、～車、～地、
～費など

・2拍のもの …○○+●●=…○○\●●
～歌(うた)、～貝、～界、～街(がいの)、
～学、～感、～心、～税、～席、～庁など

中には、複合語全体が**平板**型となるものも見られる。

〈例〉

・1拍のもの
～化、～科、～家、～課、～画、～語、
～間(ま)など

・2拍のもの
～色(いろ)、～顔(がお)、～柄、～級、
～金(きん)、～菌、～系、～状、～性(せい)、
～製、～線、～的、～人(にん)、
～品(ひん)など

※なお、後部要素が単独で頭高型となる2拍語となった場合は、**後部一**型となることもある。

〈例〉

～ガス、～価値、～主義、～都市など

②後部要素が3～4拍の場合

後部要素が頭高、平板(または尾高)の語については、**後部一**型となる。

〈例〉

～市場，～援助，～科学，～レンズ，
～判断など（もとの語が，頭高）
～油，～確認，～加工，～届など
（もとの語が，平板または尾高）

※なお，後部要素が平板（または尾高）の語のうち，一部は，**後部保存**型となる。

〈例〉

～保育所など⁷⁾

もとのアクセントが「中高」型であるものについては，次節で述べる。

③後部要素が5拍以上の場合

基本的に，**後部保存**型（もとの語のアクセントのまま変わらない）。

〈例〉

～委員会，～注意報，～文化財，
～物語など

中には，複合語全体が**平板**型となるものもある。

〈例〉

～裁判所など⁸⁾

以上のような分布が見られる。

3-2 複雑な3～4拍語の分布状況

上記の中でも，②の3～4拍語については，かなり複雑な分布状況を示している。

基本的に，もとのアクセントが，「頭高」型および「平板または尾高」型の語については，後部要素の最初の拍に核が来る。一方，特筆される例外としては，窪蘭・伊藤（1997）

で，「後部要素が漢語3形態素」として掲げているような「～保育所」などについては，複合語全体として，もとのアクセントを保ち，全体が平板（一部は尾高）となる。

また，もとのアクセントが「中高」型であるものについては，以下の3つに分類できる。

- I. 後部要素の1拍目に核が来るもの
～案内，～工場，～材料，～表現など
- II. 後部要素のアクセント核の位置をそのまま保存するもの
～作物，～自動車，～事務所，
～手続きなど
- III. その両方の形を有する（IとIIの中間に位置する）もの
～級数，～件数，～哲学，～燃料など

以上のような考察を踏まえ，アクセント新辞典の付録P.43に「複合名詞のアクセント規則」を掲げた。

4. 複合名詞アクセントについての留意事項

4-1 複合しても，アクセントが変化しない場合

第1章で，複合名詞の特徴としてのアクセント変化について述べたが，前部要素の語が，もともと平板型のアクセントだったり，後部要素の語が，もともと頭高型のアクセントだったりした場合には，それが複合しているのかどうかを判断することは難しい。

ここで「国際経済」という語を考えてみる。単独では，「国際」は平板型[コ[○]サイ^ー]，「経済」は頭高型[ケ^ーサイ]であり，2つの語が結びついて，アクセント上の変化

はない。

ところが、「○○経済」という、ほかの用例、例えば、「世界経済」「自由経済」という語を見てみると、前部要素である「世界」「自由」は、単独ではアクセント核を持っている(頭高, 中高)が、それが「経済」と結びつくことによって、核をなくしてしまうことが分かる。したがって、「国際経済」は、前部要素のアクセント変化は見られなくても、「複合している」と考えるのが合理的であり、今回のアクセント新辞典は、その考え方に基づいて、アクセント句の単位をとらえている。

4-2 語構成から見た「複合」の判断

「国際経済」が「複合化複合名詞」であることを前節で示したが、では「政治経済」はどうだろうか? 「政治」は「国際」同様、単独では平板型であり、「政治経済」にアクセント変化は見られない。しかし、その語の「意味」について考えてみると、「政治」と「経済」は「並列」の関係にあり、「自由経済」「市場経済」「世界経済」のように、前部要素が後部要素を修飾しているという関係とは明らかに異なっている。「国際経済」は、「国際」が「経済」を修飾しているのに対して、「政治経済」は、「政治」と「経済」が単に並列しているだけ(2語連続)であり、狭い意味での「複合名詞」ととらえることはできないのである。

「国際経済」「政治経済」は、どちらも前部要素(無核)+後部要素(頭高)という組み合わせであるものの、前者の「国際経済」が「複合している」のに対して、後者の「政治経済」は「複合していない」と考えることになる。

これをアクセント記号を用いて示すと、以下のとおりとなる。

「国際経済」[コ[○]サイケ\ーザイ]

「政治経済」[セージ\ーケ\ーザイ]

4-3 解説部分の

「個人名+肩書き」について

新辞典の複合名詞アクセントの解説部分では、「個人名+肩書き」について触れた(付録P.44)。

旧版の「～氏」の項目では、用例として、「足利、鈴木、田中、徳川」が挙げられているが、「鈴木」「田中」は、いずれも単独では平板型であるため、前部要素の「姓(鈴木・田中)」が、後部要素の「氏」と「複合しているかどうか」は判断できない。もし複合しているのであれば、起伏式の前部要素は、アクセント核を失うはずである。仮に、姓が「清水(頭高)」や「高橋(中高)」だった場合を考えてみると、[シミズ\シ]や[タカハシ\シ]ではなく、[シ\ミズ・シ\]や[タカ\ハシ・シ\]となることから、一般に「個人名+肩書き」は「複合していない」ことが分かる。歴史上の人物など、特別な場合を除いては、「～氏」は、複合しないのである。したがって、新辞典で立項した「～氏」については、「姓」ではなく「一族」と明記し⁹⁾、用例として、

「足利氏」[アシカカ°\シ]

「徳川氏」[トクカ°ワ\シ]

「北条氏」[ホージョ°\ーシ]を掲げた。

「～氏」のほか、各種肩書きや呼称「～監督」「～議員」「～教授」「～司令官」「～大臣」「～長官」「～博士」「～名人」などについても、前部要素が個人名の場合は、同様に複合しない¹⁰⁾。

見出しとして揚げた上記の肩書き、呼称は、現場監督、国会議員、個人教授、最高司令官、総理大臣、官房長官、医学博士、釣り名人など、個人名ではない場合の複合語である。

5. おわりに

○幅広い活用への期待

「放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント」を示すことが、この新辞典の大きな目的であるが、一方で共通語アクセントを身につけたいと思っている人や、日本語を母語としない学習者に役立ててほしいという願いもある。

例外はあるものの、一般に規則性の高い複合名詞のアクセントは、日本語学習者がアクセントを習得する際の大きな参考になるものと考えられる。また基本的に「複合することでアクセントが変わる」ことから、複合名詞アクセントの習得は、アクセントの「意識化」につながる可能性も高いと思われる。幅広く活用されることに、ぜひ期待したい。

○今後の課題

今回の改訂作業では、日本語の複合名詞のアクセント全体が、どのような体系になっているか、その全体像を定量的なアプローチによって、とらえることはできなかった。見出し語（後部要素）として立てた812項目については、代表性が担保されたコーパスから抽出してきたものではなく、いわば恣意的に選ばれた語である（日本語の複合名詞の縮図ではない）ことによる。先行研究の中には、アクセントに関する辞書の記述を定量的に分析したものもあるが、ここでは、定量的な分析は

避け、傾向の一端をさぐるにとどめた。今後、本編に掲載された2単位形の語も含め、複合名詞アクセントの全体像を、精緻な定量的分析により、明らかにする試みにも挑戦していきたい。（たなか いしき）

注：

- 1) 新辞典の巻末付録解説 Ⅲ-4 (付録P.30)「複数の単位からなる語」を参照されたい。
- 2) 特殊拍とは、撥音(ン)、促音(ッ)、長音(ー)を指す。
- 3) 後部要素のアクセント核をそのまま保存する[後部保存型]には、「平板」も含まれると考えることもできるが、分かりやすさに配慮して、[平板型]を別立てした。
- 4) 例えば、「～口」については、清音の口(くち)と濁音の口(ぐち)を別立項とするなど、清音、濁音を同一立項としたものと別立項したものが混在するため、この表に掲げた語を数え上げても283項目とはならない。
- 5) ここに掲げた用例は、本編にはないものもあるが、編集事務局でアクセントを検討して掲載した。
- 6) *は、[前部末型]のうち、特殊拍や、特殊拍に準ずる音(二重母音の第2要素、無声化音)があって、アクセント核が1拍前にずれることを示す。例えば、住民税[ジューミ\ンゼー]、指定席[シ\ニセキ]、警戒心[ケーカ\イシン]などがこれにあたる(付録P.39参照)。
- 7) 新辞典には掲載していないが、「～秘書課」「～政治家」なども同様(これらについては平板)。
- 8) 新辞典には掲載していないが、「～証明書」「～試験場」「～研究所」「～顕微鏡」なども同様。
- 9) 毛利氏を考えてみると、現代人(例えば毛利衛氏)の場合は、[モ\ーリ\シ\]。歴史上の人物(毛利元就)の場合は、[モーリ\シ]となる。
- 10) この種の肩書きや呼称の中で、「～先生」について、山下(2005)は、「一般的な複合規則には従っていない」としている。「『個人名+肩書き』は複合しない」とすると、[タカ\ハシ\センセ\ー]のみということになるが、実際の発話では、場面によって[タカハシセンセ\ー]のように、複合する(前部要素が無核化する)場合があることになる。

参考文献：

- ・秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- ・岩井康雄・窪藺晴夫（1993）「東京方言複合語アクセント規則再考」『1993（平成5）年度 日本音声学全国大会研究発表論集』
- ・上野善道（1996）「複数のアクセント単位からなる複合語」『言語』25巻11号 大修館書店: pp.57-63
- ・上野善道（1998）「複合名詞後部要素のアクセント型保存」大東文化大学講演まとめ
- ・NHK放送文化研究所（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典』NHK出版
- ・NHK放送文化研究所（2016）『NHK日本語発音アクセント新辞典』NHK出版
- ・窪藺晴夫（1987）「日本語複合語の意味構造と韻律構造」南山大学編『アカデミア 文学・語学編』43号: pp.25～62
- ・窪藺晴夫（1993）「日本語複合語における平板化形態素の作用域について」『日本語・日本文化研究』3大阪外国語大学: pp.9-18
- ・窪藺晴夫（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版
- ・窪藺晴夫・伊藤順子（1997）「音韻構造から見た語と句の境界：複合名詞のアクセントの分析」音声文法研究会編『文法と音声Ⅰ』くろしお出版: pp.147-166
- ・窪藺晴夫（2010）「語形成と音韻構造—短縮語形成のメカニズム—」『国語研プロジェクトレビュー』No3 国立国語研究所: pp.17-34
- ・佐々木啓友・吉田利信（2002）「複合名詞に対する複合語アクセント規則」電子情報通信学会編『電子情報通信学会技術研究報告. SP, 音声』101(603) : pp.9-15
- ・田中真一・窪藺晴夫（1999）『日本語の発音教室』くろしお出版
- ・松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（2012）『日本語アクセント入門』三省堂
- ・山下好孝（2005）「日本語複合語のアクセント付与規則」『北海道大学留学生センター紀要』: pp.79-90
- ・渡邊ゆかり（2013）「サ変名詞を後部要素とする「二字漢語+二字漢語」型複合名詞におけるアクセント句分割の生起要因」『広島女学院大学国語国文学誌』43: pp.15-38